東洋學報　第拾四卷第二號　大正十三年九月

周代の戎狄に就いて

白鳥庫吉

一　序論
二　通稱としての戎狄蠻夷
三　特稱としての戎狄蠻夷
四　戎狄蠻夷の人種
五　玁狁獯鬻

一　序論

人類が殆ど獸類に均しい蠻野の狀態から出發して漸く簡易な團體となり、更に進んで廣大な部落となり、終に嚴然たる國家となるまでには、固より數多の境遇と階級とを經過するのであるが、しかも其の間に於いて絶えずその進歩發達を催す動機となるものは外勢力と

の競爭奮鬪である。何れの國の歷史を繙いて見ても、その卷頭を飾る神話なり傳說なりに外人に關する物語の現はれないことは殆ど無いのは、正しく余輩の議論を證するものであつて、社會が口碑傳說を有するまでに進んで來たのは、取りも直さず其が外勢力と鬪爭を續けた結果に外ならぬのである。之を要するに物質界に於いて物體が固結するのに外部からの壓力が必要な如く、人事界に於いて社會が發達するのには外民族からの壓迫が條件となるのである。漢族の國家が氣候の溫暖な揚子江の流域に現出しないで、其の北方に位する黃河の灌域に發生したのは、その土壤が黃土質で地味の豐肥なのに因つたのは勿論であるが、又それと共に漢人が自國に伐ち込んで來る外民族と絕えず激烈な戰鬪を行はざるを得ない境遇の下にあつたことも、確にその一因となつたのである。從來歷史家の說によると、支那の春秋時代は王道が廢頹して亂臣賊子が續出した亂脈の世であり、戰國時代は略奪を事とし生民を塗炭の苦に陷れた殺伐の代であると見做されてゐたのである。然し歷史上の事實は必しも斯の如く簡單に說き去らるべきものでない。周の政治が衰へて戎狄が侵入した爲に、漢人の國家が攪亂せられ文敎が毀損せられたのは、固より拒む事は出來ない。然し之が爲に中國の諸侯が共に團結して寇敵に當らねばならぬ必要は痛切に感ぜられた。覇者が現はれて勤王を唱へ攘夷を叫んだのは、即ちその時代の要求に應じたものであつて之に依つて諸侯が九合せられ天下が一匡せられたと云ふならば、戎狄の侵入は確に漢民族の國家組織の上に一段の發達を促したものと謂はざるを得ない。戰國の時代になると前

代にあつた數多の諸侯の中で、小なる者弱なる者は漸次に大なる者强なる者に併合せられて、遂に七國に堅まつた。さうして此の七國が何れも富國强兵の策を講じて互に雄長を爭つたのであるから、兵燹の慘害は定めし甚しいことであつたに相違ない。然しながら之が爲に內にしては人知は進步し文化は煥發し、外にしては領土は四方に開拓せられ威力は異族の間に發揚せられた。さて此の時代に漢人が戎狄に對して大規模の征伐を行つたことも、又戎狄が中國に向つて大仕掛の侵略を企てたことも、史上に明載はない。然し燕趙秦の三國が各〻その北邊に長城を築いたのは事實であるから、戎狄が武力を擁して背後から常に漢族を威嚇してゐたことは爭はれない。秦の始皇帝が六國を滅ぼして天下を統一すると、直に全國の兵力を盡して匈奴の征伐を行ひ、又その財力と人力とを傾けて萬里の長城を築いたことから之を考へると、戎狄の防禦は如何に漢民族の大事件であり、又その向背は如何に國家の盛衰に關係したかゞ窺はれる。若しも斯樣な見方が正しいとすれば、從來の歷史家が戎狄に文物や制度に觀るべきものが無いからと云つて、一概に之を等閑に附し、殆ど之に注意を拂はない傾向のあつたことは、遺憾に堪へない。然しながら余輩は今此の精神を以て戎狄の全史を書かうとするのでない。本論の題目は周時代の戎狄であるから、時期に於いて既に制限があり、且またその戎狄と云つた處で、先秦の文籍に散見する記事を蒐集綜合して、其の盛衰興亡を叙述しようとするのでない。論究の目的は其の人種に就いてゞある。周代の戎狄は果して今日の何人種に屬するかと云ふ問題は未だ學者の考察を經て

ゐない。これは畢竟するに文獻の不充分な爲であつて、何人が之に手を下すにしても至難の業であるから、余輩が今大膽にも此の難問を揭げて卑見を學界に質すからと云つて、敢て之を解決し得たと確信するのではない。たゞ余輩が此の問題に對する態度と之を解釋する方法とに於いて稍〻世間のものと異る所があると信ずるので、試に之を開陳して此の問題の解決に一歩を進めて見たいといふに過ぎない。

二　通稱としての戎狄蠻夷

秦漢以前の文獻には異民族と思はれるものが處々に散見して、その數は決して少くない。さうして其の中の或るものに於いては人種も住處も殆ど明に了解せられ、また或るものに於いては其の性質は詳に知られないが、その據つた方位だけは大概推測せられるのである。然るに周の時代から已に外人を呼ぶ汎稱となつてゐる戎狄蠻夷の場合には其の元來の素性と住地とを考定するのに非常の困難がある。然し外民族をいふ稱呼が特殊のものから次第に廣汎のものになつて行くことは、東西の歷史に徵してその例に乏しくない。例へば韃靼の如き之は興安嶺の東北部に據つた蒙古の一部落を指したものであるが、唐の末頃からその範圍が廣くなつて終に北狄を呼ぶ總名となり、又 Scythia の如き Herodotus の時代には黑海の東北方にゐた一種族の名稱に過ぎないのが、後には Ural 山の東に住む總ての游牧民を呼ぶ汎稱となつた類で、かやうな例は尙この外にも澤山あつて殆ど枚擧するに遑がない。

さるが故に支那の戎狄蠻夷といふ四稱に於いても、當初から異族をいふ汎稱でなく必ず一定の場處にゐた一定の部落若しくは民族を指したものに相違ない。先づ此の方針を以て史籍を檢索すると、墨子の節葬篇下第二十五の處に「墨子曰、不然、昔者堯北教于八狄、道死、葬于蛩山之陰、……舜西教于七戎、道死、葬于南己之市、……禹東教于九夷、道死、葬會稽之山」とある一節に注意が向けられる。墨子の年代は未だ的確に知られないが、孟子より前の人に相違ないから、戰國時代の漢人は北方の民を狄、西方の民を戎、東方の民を夷と呼んだであらうといふ想像はつくが、たゞ此處には南方の民を何と稱したかが記してない。然るに戴記の曲禮篇には「東夷北狄西戎南蠻」とあり、禮記の王制篇には「東方曰夷、南方曰蠻、西方曰戎、北方曰狄」とあり、爾雅には「九夷八狄七戎六蠻謂之四海」といふ解釋が見え、又史記(卷五)の五帝本紀には「於是舜歸而言於帝、請流共工於幽陵、以變北狄、放驩兜於崇山、以變南蠻、遷三苗於三危、以變西戎、殛鯀於羽山、以變東夷、四辠而天下咸服」といふ文が載せてある。此等の例證を以て推測すると、戰國から漢代に亙つて、戎狄蠻夷の四字は中國の四裔に據つた民族に配當せられた稱呼であると斷定して差支はない。然し其が果して實際の事であるか何うか。試に史記(卷一百十)の匈奴傳に「匈奴其祖先夏后氏苗裔也、……唐虞以上有山戎獫允葷粥居于北蠻」とある一節を見るがよい。匈奴が支那の北方にゐたのは論ずるまでもないから、前に引用した數書の筆法からすれば、匈奴は北狄と呼ばるべき筈であるのに、漢代の司馬遷が之れを北蠻と稱して怪まないのを見ると、當時北方の民は必しも北狄と云はれなく、從つて南方の民は必しも

南蠻と云はれなかつたことが推される。更にまた此の書(卷六)の始皇本紀に蒙恬將軍が匈奴を經略した次第を述べてある處を讀んで行くと「又使蒙恬渡河南取高闕陶山北假中築亭障以逐戎人」とある文に逢着する。此の戎人は明かに匈奴を指したのであるから、當時戎の名は西方の民に限つて使用せられたのでないことが分かる。戎狄蠻夷の四稱が中國の四邊に住居した民族にそれぞれ規則正しく配當せられてゐないのは、獨り漢代の文籍に限らないで、周代の記錄からも亦數多の例證を擧げることが出來る。例へば尙書の禹貢梁州の條に「和夷底績」とあり、詩經の綿篇に「昆夷駾矣」とあり、又孟子に「文王事昆夷」とある記事がある。此の和夷と昆夷とは明白に西方の異族であるにも拘はらず、之を夷と稱してゐるではないか。また詩經の釋奕に「以先祖受命、因時百蠻」とあるのは正しく西方の民を指したのであるが、之を蠻と呼んでゐるではないか。此の外春秋傳に「公及戎盟於唐」とあり、「齊公伐山戎」とあり、「無終子使孟樂如晉請和諸戎」とあり、「楚大饑、戎伐其西南、又伐其東南」とある文を讀んで一々此等の戎がゐた方位を考察すると、其が東南北の三方にも據つてゐたことになる。先づかやうな次第で戰國から漢代に亙る或る學者は戎狄蠻夷を四裔の民族に配當した名稱であると明言してゐるに拘はらず、或る書籍には全くその區別を認めてゐない。然らば何れを正しいとし、何れを誤りとすべきか。此の問題に對して解決を試みたのは崔東壁である。此の學者の說によると、古來蠻夷戎狄を四方に分つて說く者があるけれども、其は決して正しい見方でない。此の四稱の中蠻夷は四方の異類を呼ぶ惣稱であつて、戎狄は蠻夷の中の部落

をいふ名稱であるから、之を蠻夷と同列に置くべきものでない。其の證據に禹貢を見ると、要服に屬するものを夷といひ、荒服に屬するものを蠻と云つてあり、また堯典に「蠻夷猾夏」といふ文句もある。して見ると九州の外邊にゐた外人を總て蠻夷と稱へたのであるが、之を亦戎狄と呼んだ例證を見出さない。元來夷といふ言は裔と同じ意味で、九州の邊裔に據つた處からその名を得たのであらう。それ故に冀州と揚州とに島夷があり、青州には嵎夷があり、徐州には淮夷があり、梁州には和夷がある、而して之を要服の中に收めたのは其の禮敎の稍〻觀るべきものがあるが故であつて、蠻が荒服に屬したのはその風俗が野鄙でその無知な樣子はさながら虫けらの如くであつたからである。して見ると蠻と夷とは內外を以て分つべきもので、之を東西によつて區別すべきものでない。然るに史書に往々夷を東方に蠻を南方に置くものゝあるのは何故かと云ふに、當時文筆を事とする者に齊魯の人が多かつた關係から、已に近きものを夷と呼び、已に遠いものを蠻と云ひなしたのであつて、其の誤謬は明かである。戎とは元來西方にゐた蠻夷の一種で例へば氐羌のやうなものであり、狄とは北方にゐた蠻夷の一種で追とか貊とか云ふやうな類である。經傳に散見する異族の中には此の戎と狄との外に尙庸、蜀、髳、彭、微、盧、百濮、百越などがある。たゞ此の中で戎と狄とが最も强盛であつたと見えて四方に分散してゐる。故に狄は冀州にも雍州にも居り、戎は秦楚、晉、齊、魯、燕の諸國に隣接して漢晉の際に於ける氐羌の如くに各處に蔓衍してゐる。戰國の世になると、戎狄の勢は衰へて後には殆ど聞えなくなつたけれども、戎を西に狄を北

に置き、之に蠻夷を加へて中國の四方に配布する考は、決してその當を得たものでない。だから春秋の中に「公會戎于潛」「齊人狄人盟于邢」「公伐戎」「衞人侵狄」「戎侵曹」「狄伐鄘」「狄侵我西鄙」「晉人敗狄于箕」などゝいふ記事は數多見えるが、之に反して夷が某國を伐つとか、蠻が某國を侵かすとか、夷と會し蠻と盟ふとか云ふやうな文句は絶えて記されてゐない。且また左氏春秋には吳、楚、鄭、莒の諸侯が往々蠻夷と稱へられた例はあるが、嘗て之を戎狄と呼んだことを見出さない。先づ斯やうに考究して來ると、戎狄は特殊の國名であつて蠻夷は外民族をいふ通稱であると論じてゐる(崔東壁遺書第三冊、豐鎬考信別錄卷之三)。

崔氏の此の議論は如何にも詳細で一と通り條理が立つてゐるやうに見えるから、一寸之を讀むものは一應尤に思ふかも知らないが、少しく仔細に之を吟味すると異議をさし挾むべき餘地は充分にある。此の學者の說によると、戎と狄とは特殊の外民族を呼ぶ名であり、その中戎の如きは秦、楚、晉、齊、魯、燕の諸國に隣接したとすれば、此の民族は九州の殆ど全土に蔓延してゐたと見做さなければならぬ。が、かやうなことが實際にあり得べきかどうか。禹貢によると、雍州の境內にゐた西戎の一種に析支といふのがある。これは後漢時代の賜支、唐時代の黨項と同種であつて、今日の西藏種に屬することは、余輩の已に論證した如くである。それ故に戎が果して特殊な民族の名稱であるならば、さうして亦其が西藏種に屬するといふ余輩の考察に誤がないとするならば、中國の他の方面に現出する戎もまた同民族と見做さなければならないわけであるが、其が果して事實であらうか。先づ試に春秋の時

代に主として齊魯の二國を侵した山戎の例を取つて之を論じて見たい。有史時代になつてから民族の間に多少の移動があつても、その一部分は多くの場合に於いて故地に留まるのが常であるから、山戎の人種を推定するに際しても、先づその持つてゐた地域を確かめるのが必要である。管子上大匡十八の處に「桓公乃北伐冷支、下鳧之山、斬孤竹、過山戎」とあり、又その二十の處に「北伐山戎、制冷支、斬孤竹」とあり、更に史記(卷三十)の齊世家を讀むと「桓公稱田、寡人南伐至召陵、望熊山、北伐山戎、離枝、孤竹、西伐大夏、涉流沙」といふ一節があり、又同書卷五)の秦本紀成公九年の條に「齊桓公伐山戎、次于孤竹」といふ文句が見える。さて此等の記事に依つて山戎の方位を考へると、齊の國からは北方に當り、冷支や孤竹や無終に隣接してゐたことは疑はれない。史記正義によると「孤竹故城在平州盧龍縣十二里」とあり、又同書匈奴傳に見えたる山戎の注に「正義曰杜預云、山戎無終北戎無終之名也、括地志云、幽州漁陽縣本北戎無終國」とあるから、山戎が北京の北方に連亙する山谷の間に住居した民族であることは明白である。服虔の說に「山戎蓋今鮮卑」とある。此の學者は何に據つて斯く斷定を下したのであるか今之を知るよしはない。然し直隸省の北部をなす西喇木倫河の流域が戰國時代から秦漢に亙つて東胡の住地であり、漢代から三國を經て晉代に至る間に東胡の苗裔と稱する烏丸鮮卑の原地であり、さうして此等の民族が何れも蒙古種を骨子として之に Tungusse 種を加味した雜種であることは、余輩の特に考究した處であるから、春秋時代の山戎もやはり之と同種であらうとするのが妥當であつて、之を西藏種の一派とする何等の理由を見出

さない。以上の考證に誤がなく禹貢の西戎の一種析支が西藏人であり、春秋の山戎が蒙古或は Tunguse 種であるとすれば、崔氏が戎を一部落或一民族の名稱と見る說は到底維持することは出來ない。狄の名は戎の如く廣く使用せられてゐないが、此の名を負ふものは冀州にも雍州にもある所から之を察すると、之を一部落の稱呼と見ることは固より困難である。

戎狄に關する如上の論證によると、之を崔氏の說いたやうに特殊の名稱と見るよりも、寧ろ之を異族を呼ぶ汎稱と解した方が穩當である。同氏はまた禹貢に載せたる五服の制に夷は要服に蠻は荒服に屬するのを論據として、蠻夷は中國の周圍に住する異類を呼ぶ通稱であると斷定し、戎狄と之とを截然と區別したけれども、余輩は亦此の意見にも贊成を表することが出來ない。崔氏は禹貢の五服のみを擧げて他の書に見える五服の制を參考に供しないのは何故であらうか。國語(卷第一)を繙くと蔡公謀父が穆王を諫めた言の中に「夫先王之制、邦內甸服、邦外侯服、侯衞賓服、蠻夷要服、戎狄荒服」といふ文句があり、荀子の正論篇にも「故諸夏之國、同服同儀、蠻夷戎狄之國同服不同制、封內甸服、封外侯服、侯衞賓服、蠻夷要服、戎狄荒服」と見え、又後漢書(卷百十七)の西羌傳に大將軍梁商がその部下に語つた言の中の「戎狄荒服、蠻夷要服」といふ文句がある。此等の例證によると、先王の制定した五服の制に差異のあるのが認められる。即ち禹貢の中なる五服の制に從ふと、夷は要服に蠻は荒服に屬してゐるが、上に引用した國語などに據ると、蠻夷は要服に戎狄は荒服に收められてゐる。崔氏は禹

貢のを楯に取つて蠻夷は荒要二服に屬するが故に、九州の四邊に據つた民族を呼ぶ總名であると斷定し、戎狄は五服の中に見えないのも一つの理由になつて、蠻夷の中の部落の名稱であると考定せられた。然し國語にある五服の制によると、蠻夷は要服に戎狄は荒服に屬してゐるから、もしも崔氏の論法を此處にも適用するならば、戎狄も亦九州の周圍に據つた異族を指した通稱と謂はざるを得ないことになる。是を以て見ても崔氏の考察が、根本的に誤つてゐるのが了解せられる。然らば何が故に禹貢の五服の制によると、夷は要服に蠻は荒服に屬するに反して、國語の五服の制によると、蠻夷は要服に戎狄は荒服に屬することになつてゐるのであるか。均しく先王の定めた制度に此の如き差異のあるのは、甚だ怪むべきでは無いか。思ふに是は禹貢と國語とが作られた時期に差異があつたと假定するでなければ、到底解決する途は無いであらう。即ち禹貢の編作せられたときには夷と蠻とが已に總名になつてゐたから、之を五服の中に收めたのであるが、戎と狄とは尙或る異族を指す名稱に限られてゐたから、之を五服の中に入れることが出來なかつたのであらう。然るに國語の編述せられた時代になると、戎狄も亦總稱となつてゐたから、夷と蠻とを、同列に置いて之を要服に收め、戎と狄とを同格と見做し、之を荒服の中に入れて、五服の體裁を備へたのであらう。禹貢と國語とが編作せられた年代は的確に知られないが、禹貢が國語よりも古いのは確かであり、又戎狄蠻夷の四稱が戰國時代に悉く總名となつてゐたことも斷言して差支はない。

三　特稱としての戎狄蠻夷

秦漢以前の文獻に現はれた戎狄蠻夷が已に廣汎な名稱であるとすれば、記錄の上から當初此の四稱で呼ばれた民族の性質と方位とを考察する便宜は全くないことになるが、幸にも漢字は象形文字であるから、戎狄蠻夷の場合に於いても此等の文字の構造を解說すると、之に依つて幾分か其の表はした民族の歷史を這ることが出來る。

狄。先づ狄の文字から解說を試みることゝする。說文によると「狄北狄也、本犬種、狄之爲言、謠辟也」とあるが、王國維は此の解釋に從はないと見えて、其の著作に係る鬼方玁狁考に於いて、狄は遠の義であると說いてゐる。さて此の狄は漢人の方から外人を呼んだ名であるか、但しはその土言を此の文字で書き表はしたものであるか、今遽かに之を決することは出來ない。然し漢人は古から北方と西方とに據つてゐた民族を呼ぶ名稱に獸類の意味を有するか、但しは獸類の意を偶する文字を使用する習慣である。例へば今日の直隸省の北部から滿洲の方面に據つてゐた民族を貊とも獵ともいひ、匈奴の一種で山西省に侵入した部落を羯といひ、又從來匈奴の祖先と信じられてゐた民族を獯鬻とも玁狁とも猃狁とも書く類である。又西方に住居した異族に對しても同樣の文字が選ばれる。例へば太古から西藏の東北部にゐた民族を羌といひ、說文によると羌は羊種であると說いてあり、又此の羌と共に記載せられる民族に氐といふのがある。此の文字は多分羝の省略であらう。說

文によると羝は牡羊であるから、氐も亦羌と同じやうに羊に因んで命ぜられた稱呼であらう。尙此の外西戎の種類に犬戎があり、貊がある。何れも獸類に緣故を有する名稱である。さて此の種の名稱は元來漢語であるか、但しは土言であつて之を譯するのに獸類の文字を選んだものであるか、其の事は未だ明かでない。然し狄はまた翟とも書き、犬戎はまた畎戎、混夷、昆夷、緄夷とも書き、獯鬻はまた葷粥とも、薰育とも書き、玁狁はまた、猃狁とも書くのを見ると、此等の名稱はもと其の土人の自ら稱へてゐたのを漢人が之を譯する際に特に獸類に因む文字を選んでかたがた輕蔑の意を偶したものではあるまいか。さうして此の場合に使用せられる文字の偏には豸と羊と犬と馬との四種があつて、中にも犬偏のものが最も多いのは、其の土人が獰猛で犬に類するといふ意味に相違ないが、尙此の外に理由はないであらうか。說文によると「匈奴地有狄犬、巨口而黑身」とあり、又史記(卷四十三)の趙世家惠文王三十六年の條に「代、馬胡、犬不東上、昆山玉不出、此三寶者亦非王有也」といふ一節があるから、今日の蒙古に據つた胡狄の間に名犬を產したことは周の時代から已に有名であつたに相違ない。又尙書の中に旅獒といふ一篇がある。これは西戎の一種と知られた旅人が周の天子に獒といふ名犬を獻したときに臣下の諫めた文章である。されば西戎にも名犬を產したのである。此等の事實から之を考へると、支那の北方と西北方に據つてゐた民族の名に犬偏のついたのが多いのは、此の地が名犬の產地として有名であつたことも多少參考した氣味はあるまいか。それは何れにしても戎狄の名稱に獸類に因んだものが多い所から之を考へ

ると、狄といふ稱呼に假令西戎にも附けられる理由はあるとしても、之が東方や南方にゐた種族に對して命ぜられたものとは思はれない。西戎の中には羌があり氐があり貊があるから、之を亦狄と呼んだとしても何の怪むべきことはない筈であるが、此の方面の民族に對しては古から戎といふ特稱があつて狄と區別せられてゐるから、狄の名は元來北方の民族に限つて使用せられた言と見るのが妥當であらう。

蠻。北方の種類を呼ぶ名に犬偏の附いたものが多いのと同じやうに、南方の民族をいふ名に蟲の字を有するものが少くない。支那の東南部の海岸に據つた種族を古は閩と稱へた。說文によると「閩東南越、它種从蟲」とあるから、閩といふのは元來蛇の一種である。又周の時代に只今の唐慶府の附近にゐた部落を巴と稱へた。說文によると「巴蟲也、或象食它」とあるから、巴も亦蛇の一種である。また其の時代に只今の成都にゐた種族を蜀といひ、說文によると「蜀葵中蠶也、从蟲」とあつて、之もまた蟲の一種である。而して周の時代から此等の種族を凡て蠻と呼ぶことがある。それでまた說文を引いて見ると「蠻南蠻、它種从蟲」とあるから、これも亦蛇の類である。先づ斯やうに漢人は上代から南方の人民を表はすに蛇や蟲に緣故のある文字を選んだ風習のあつたことから之を察すると、蠻といふ名稱は決して四方の夷類を呼ぶ總名でなく、元は專ら南方の民族を指したものである。然らば何が故に漢人は南方の民を蟲類に擬したのであらうか。詩經の小雅の中に「蠢爾蠻荆、大邦爲讎」といふ言があつて、よく此の疑問に答辯を與へると思ふ。想ふに南方の民は風俗が野鄙でその容

貌が蠢爾として無知なること蟲の如しといふ處から、其の名に蟲を附けて之に輕侮の意を表したものであらう。それは宛も北方の民は性質が獰猛で殺伐の風があるので、其の名に犬偏をつけて之に憎惡の念を偶したのと同一の心理作用から發したものと思はれる。然し前にも述べた如く北狄の名に犬偏のつく文字の多いのは、其の住地に良犬を產するといふ事實にも基くかと考へられるが、其と同じやうに南蠻の名に蟲字のつくものが多いのは、その土地が暑熱で蟲蛇の類が多いといふ事情にも多少因るのではあるまいか。其はともかく北狄の名稱に獸類に因んだのが多く、南蠻の名稱に蟲類に緣のあるのが多いのは、爭はれない事實である。然し何事にも例外はあるから、蠻狄の場合にもそれは免れない。例へば後漢書の南蠻傳によると、南蠻は槃弧といふ犬の子孫であるといふ。是は蠻種を獸類とする思想で固より例外であり、又南北朝の頃に蒙古に據つた柔然といふ民族を魏の太武帝が蠕々と改名させたことがある。是れは北戎に於ける例外である。

戎。以上蠻狄の二字を構成する文字の解釋に依つて、狄は北方の民に、蠻は南方の民に與へられた名稱であると一決すれば、戎と夷とは自ら東西の二方に限られるわけである。說文によると戎の字は甲と戈との二字から組立てられたもので、元は兵器を云ひ、更に轉じて軍事の義となつたものである。たゞ此だけの解釋では夷が果して東方の民であり、戎が果して西方の民であるといふ論據は得られない。然し余輩は尙書の禹貢の中に之を決定すべき證左を見出したと思ふ。此の書に記された五服の制によると夷は要服に屬し中國の

四裔に據つてゐた民族を呼ぶ總稱となつてゐる。それ故に冀州と揚州とに島夷があり、青州に萊夷嶋夷があり、梁州に和夷がある。是は明かに禹貢の編作せられた當時に於いて、夷の名は已に外人をいふ總稱となつてゐたことを證するのである。然るに戎と狄とはその頃尙一定の方法に據つた民族を指したものと見えて、要服にも荒服にも收められてゐない。さうして禹貢の雍州の條內には析支、渠搜、崑崙の三種が記されてあつて、之を西戎と稱へてゐるから、之に依つて戎が西方の種族を呼ぶ名稱であることが分かり、從て夷が東方の民族を指す名稱であることが推知せられるのである。

夷。戎が已に西と極まれば、夷が東に定まるのは當然である。崔東壁の言に從ふと、夷は裔と同義で、中國の邊裔にゐる處からこの名を得たといふことだが、夷が要服に屬して四方の外人を呼ぶ名となつたのは、其が已に汎稱となつてからのことで、當初は必ず或る一定の方面に據つて民族を指したのに相違ないから、崔氏の此の解釋は決して其の原義を究めたものでない。そこで例によつて說文を引いて見ると、「夷東方之人也从大从弓」とあつて、夷の字は大と弓との二字を組み合せて出來た文字で、時にはまた之を夸と書くこともある。東方の人を呼ぶになぜ夸の文字を用ゐたか、其は人によつて解方も違ふけれども、先づ試に郭璞の注を引くと、「南方蠻閩从蟲、北方狄从犬、東方貉从豸、西方羊羌从羊、西南僰人焦僥人从人、蓋有坤地、頗有順理之性、惟東夷从大大人也、夷俗仁仁者壽、有君子槿死之國、按天大、地大、人亦大、大象人形、而夷篆从人、則與夏不殊、夏者中國之人也、从弓者肅愼氏貢楛矢石砮之類也」と說いてゐ

る。郭氏が若しも大の字を單獨に絶對に見て之に人の義があると云ふならば、或は正鵠を失はぬかも知れない。國語で太をフトといふと共に、人をヒトともフトともいふ例などもあるから。然し大の字に人の義もあるからと云つて、夷の字を組織する大が必しも人だといふ譯には行かない。然るに同氏は頭からこの大を人だと極めこんで、さてそこで人は仁であり、仁は壽であると推し廣げ、だから君子不死の國が此の方面にあるのは偶然でないと說くに至つては、是全く方士や道士などが云ふやうな談で、到底附會の說たるを免れない。又夷の字の一部弓の解釋に肅愼氏が楛矢石砮を獻上した事實を引いて來て、夷の名で呼んだ民族の說明としたのはよろしいが、一字の夷を解くのに之を組立てる大と弓とを全然引き放して別々に說明を加へるのは、決して穩當な方法でない。若しも郭氏の說を試に具體的に表すならば、夷の一部大の方は扶桑國や蓬萊島のやうな仙鄉の人をいふことになり、他の一部弓の方は靺鞨や女眞のやうな野人をいふことになる。文字の解釋も此のやうになつては滑稽の極である。夷の字の元素は已に說文にある如く大と弓とであつて、東方の土人が大弓を使用したから夷の名を得たとすれば、誰にも首肯かれる話でないか。それに何を苦んで此の大を無理に人と解し、夷を人と弓との二ッの觀念を表す語とする必要がある。此の位の事は三尺の童子にも考へられるが、況して郭氏の如き學者の頭に此の覩易い道理が分からぬ筈はない。想ふに郭氏は夷の字を分析し、其の要素で、此の名を解かうと努めるのでなく、却つて之に依つて自己の哲理を述べようと企てたのではあるまいか。然らばそ

の哲理とは果して何か。余輩は玆に戰國の時代から漢土の學者の思想を司配した陰陽五行說の應用せられた事實を陳べて、此の疑問に對する答辯としたい。

戰國の初期に生存した鄒衍等の一派が陰陽五行說を盛に唱へ始めてから、支那の學者は宇宙の萬事萬物を此の哲理で說かうとする傾向に走つた。そこで中國の四方にゐた民族の起原を論ずるにも、またその性質を語るにも此の學說を應用した形跡が認められる。陰陽說によると東方は陽氣の本源地であり、五行說に從うと此の方面は木德の發祥地であるから、その國土には草木繁茂して凋落することなく、その國の人は長壽を保つて夭折の患がなく、性質は柔順で仁德に富むと信ぜられた。戰國の末から秦漢に亙つて蓬萊國や君子國さては不死國などが此の方面に現出したのは、全く此の思想の發露に外ならぬ。元來此等の國々は理想から現はれた神仙鄉であるから、それに就いての物語は陰陽五行說に脗合して、其の間に何等の矛盾も起らないが、後世になつて學者が地理上または歷史上の事實を此の哲理に由つて說かうとするやうになつてから、種々の無理や困難が生じてきた。例へば宋の范曄が撰んだ後漢書の東夷傳の劈頭に「王制曰、東方曰夷、夷者柢也、言仁而好生、萬物柢地而出」（事見風俗通）故天性柔順、易以道御、至有君子不死之國焉」とあるに於いて、見らるゝが如きは、それである。さて玆には夷を柢と解いてあるが、說文や正義などには平と說き、王肅や馬融などは易と云つてゐる。かやうに此の字の解釋について學者の意見が區々になつてゐるのは、畢竟之に定說が無いからであるが、夷は陵夷などゝ熟字となる例から之を平と說いても、

又夷と易と音聲の同一なことから之を同義の文字と解しても、誰も之を怪まないであらうが、後漢書に之を柢と云つてゐるに就いては、殆ど其の眞意を索むるに困難である。字典を參考すると、柢は根と說かれてあつて、夷の字とは何等の關係がないやうに思はれるであらう。然し曾て後藤朝太郎氏が考へた如く(文字の研究六頁)夷の古音に果して tei があつたとすれば、此の字は柢と音聲の類似を有することになるから、王肅などが之を易と說き崔東壁が之を裔と見たのと同樣に、發音の類似によつて其の字義を推定したのであらう。夷の字義には元來定說が無いのだから、之を如何やうに說かうとも、それは學者の勝手とはいふものの、後漢書の編者が之を柢と解き、郭璞が之を人と見たなどは附會の甚しいものである。思ふに此等の學者は文字の爲めに文字を解くのではなく、自己の抱懷する五行說を述べんが爲に、文字を說いたものとしか思はれない。其の正鵠を得ないのは勿論である。

支那の學者が四裔の民族をとくに陰陽說や五行說を應用したのは、たゞに東夷にのみに限らないで、他の三方の民族にも應用した形跡が認められる。先づ西戎に就いての一例を擧げて見るならば、後漢書(卷百十七)の西羌傳に「其兵長、在山谷、短於平地、不能持久、而果於觸突、以戰死爲吉利、病終爲不祥、堪耐寒暑、同之禽獸、雖婦人產子、亦不避風雪、性堅剛勇猛、得西方金行之氣焉」とある如きは、明白に羌人の性質を五行說で解釋したのである。南蠻と北狄に關しては東夷と西戎とに於けるやうに五行說を附會した明瞭な記事を見出さないが、尙その痕跡はおぼろげにも認められる。例へば後漢書の南蠻傳に南蠻は高辛氏の女が槃瓠といふ

犬と結婚して出來た子供の子孫だとあるが如き、又史記の匈奴傳に匈奴は夏后氏の苗裔だとあるが如きは、即ちそれであると思ふ。古來傲慢を以て有名な支那人が自國の聖人を蠻狄の祖先と見立てゝ毫も恥ぢないのは、一寸解し難いやうなれど、彼等の所謂夏夷の別は專ら文敎の差等にあつて、人種の同異にはないのである。由來天下の君主を以て自ら許す漢人の立場から見れば、四海は一家で人類は兄弟である。上代の支那人がローマ人を秦人の苗裔だといひ、印度の釋迦を老子の化身だといひ、又倭人を吳の太伯の後だといふなどの事實は、彼等が人種に差別を立てない强い證據ではないか。して見れば南蠻が高辛氏の子孫で、北狄が夏后氏の苗裔だといふ傳說が、彼等の間から起つたとて、また何等怪むべきことはない。たゞ問題は數の多い上代の聖人の中から特に北狄の祖先に夏后氏、南蠻の祖先に高辛氏を選んだのは果して何故か、或は偶然の思付か、或は其の間に何等か理由のあつたことか。彼の高辛氏は如何なる人物かといふに、呂氏春秋(卷四)に見えたる祝融の註に「祝融顓瑞氏後老童之子吳回也、爲高辛氏火正、死爲火官之神」とあるから、此の人は元來火德の王と信ぜられたのである。五行說によると、南は火の方角に屬するが故に、南蠻の祖先が高辛氏から出たといふ傳說は、全く此の學說に淵源したのである。夏后氏が水德の王であつたことは、史上に其の證徵を得ないが、禹王が洪水を治めた功績は顯著な事實である。五行說によると、北は水の方角に屬する處から夏后氏即ち禹王が北族匈奴の祖先と見たてられるのであらう。且また禹貢によると禹王は治水の功績によつて舜から玄圭を錫つたとある。此の

玄圭の玄は北方神をいふ玄冥或は玄武の玄で、水氣の暗黑なのを意味するのであるから、此の一事にも五行思想が含まれてゐる。されば假令史上にその明載はないにしても、禹王は早くから水德の君主と承認せられたのであらう。若しも此の推測が許されるならば、匈奴の祖先は夏后氏だといふ傳說も、亦五行思想の發露に外ならぬことになる。

以上戎狄蠻夷の字義と起原とに關して五行說のいふ所は、漢人の思想を窺ふのに好箇の材料を共するに相違ないが、實際歷史上の事實を語るものとしては、何等の利益を與へない。然し余輩が戎狄蠻夷の四字についての考察によれば、少くとも此だけの事は云はれる。即ち古代の漢人は北方の民の獰猛なのを惡んで之を狄といひ、南方の民の無知なのを卑んで之を蠻といひ、東方の民の大弓を使用したのに由て之を夷といひ、西方の民の甲戈を所持したのに由て之を戎と云つたのである。さて此の四稱の民族の中で蠻夷は禹貢の編作せられた當時既に汎稱となつてゐるが、戎狄は尙西と北とに限られた名稱と思はれる。然るに戰國の時代に降ると、此の戎狄もやはり蠻夷のやうに四裔の何れの民族にも適用せられる通稱に變化したのに拘はらず、戰國末の著作と思はれる墨子や漢代にできた禮記などに戎狄蠻夷が劃然と四方に配當せられてゐるのは、果して何故であらうか。想ふに此の四稱が廣汎に使用せられたのは當時の實際であつて、之を四方に配當したのは、學者の理論であらう。然らばその理論とは何かと云ふに、それは陰陽五行の學說であらう。此の學說が廣く行はれてから、漢土の學者はとかく陰陽說によつて萬事萬物を相對的に並立せしめ、又五行

說によつて之を五方乃至四方に配置する風になつた。だから北方の狄に對して南方の蠻を置き、東方の夷に對して西方の戎を置き、各々その類を以つて對立の位置を定めたのは、陰陽の思想に因つたのであり又漢人を中心として戎狄蠻夷をその四方に配置したのは、五行思想に基いたものであらう。さうして彼等が東方に夷、西方に戎、北方に狄、南方に蠻を定めたのは、恰も此の四稱の起つた當初の本義に脗合することになるが、是は多分偶然の脗合でなく、實はその本來の觀念が既に汎稱と變した當時に於いても、尙幾分か人の記憶に遺つてゐたからであらう。

四　戎狄蠻夷の人種

何れの國の歷史を見ても、始は或る特殊の外夷を呼んだ名稱が、後には其の方面に現はれた總て外人をいふ汎稱となるのが常である。戎狄蠻夷の四稱も亦この變化を經たものと察せられる。さて此の四稱の中で戎狄の汎稱となつたのは、蠻夷の後であり、又蠻夷の中で蠻の汎稱となつたのは夷の後、戎狄の中で狄の汎稱となつたのは戎の後であつたやうに思はれる。然らば何が故に支那の周圍に據つた外國人を呼ぶ名稱が、夷蠻戎狄の順序を追うて次第に汎稱となつたかといふに、それは多分此等の異族が、漢人と接觸交涉した時期の前後に原因するのであらう。さうして此の時期の前後を考察するには、先づ第一に漢人の發祥地を承知して置く必要がある。禹貢によると、今の山西省に當る冀州に禹王の都が在つ

たことになる。後世の傳說に堯は平陽に舜は蒲坂に禹は安邑に都を奠めたといふのは禹貢に胚胎した事であり、又殷の都は商亳、周の都は酆鎬洛邑であつたとすれば、漢人の據つた本源地が大體に於いて陝西省にあつては渭涇洛三川の流域山西省にあつては汾水の流域、河南省にあつては伊洛二水の流域にあつたと見て大過はなからう。さて此の地域の漢人が四方に發展するに方つて、最初その何れの方面に領土を開拓し、何れの民族と交渉關係を起したかと云へば、それは確かに黃河の流に沿うて東方に突進し、其の緣邊の人民を征服したのに相違あるまい。此の方面は土地が平坦で何等漢人の進路を遮るものがないのみか、その地質は漢人の國土に於けるが如く黃土であり、從つてその土人の生活狀態は漢人のそれに類似したのであらう。若しも此の考察に誤がないとすれば、漢人と最も早く交渉關係を開始した外種族は東夷であると斷定して差支はない。さて其の次に漢人の鋒先は南方に向けられたのであらう。察する所、河南省や山東省邊の漢人は各〻南して淮泗二水の流域に進み、更に下つて揚子江の下流域に達し、又陝西省邊の漢人は二手に分かれ、その一手は漢水の流域に、他の一手は四川省の方面に發展したものと思はれる。若しも此の推測が許されるならば、漢人が東夷の次に交渉關係を開いたのは、南蠻であると見てよろしからう。禹貢の編作せられた當時已に夷も蠻も共に外人を呼ぶ通稱となつてゐたことは前に述べた如くであるが、その中にも夷が要服に蠻が荒服に收められたのは、夷は元來東方にゐて早くも漢文化の影響を受けて稍〻開明の域に進み、蠻は南方に僻在して尙粗野の風俗を脫し

得なかつたからであらう。さて然らば此の夷と蠻とは果して今の何人種に屬する民族であつたのであらうか。此の疑問に對しては文獻の徵すべきものが無いから、的確に解釋を與へることは出來ない。然し東夷の萊夷や嵎夷が早くも齊の國に併合せられ楊子江の下流域に據つた蠻族が吳の國となり、その中流域を占めた荆蠻が楚の國となり、その上流域にゐた巴蜀の類が秦と楚とに分割せられたのは春秋時代の出來事であるから、此等の蠻夷が漢人と全く性質の異つた民族であつたとすれば、その變化の餘りに急激迅速なのに驚かざるを得ない。想ふに此等の民族は元來漢人の類族であつて、其の言語も風俗習慣も上代にあつては漢人と大差の無かつたのではあるまいか。若しさうでないとすれば、春秋時代の初期に尙荆蠻と貶稱せられた國民が、僅々百年ばかりの間に吳となり楚となつて、中國の諸侯と肩を比べたことは、到底思惟することができない。

戎狄蠻夷四稱の中で最も早く通稱となつた蠻夷の間に親疏の別があつて、漢人に接觸した年代に差異があつた如く、其の後に通稱となつた戎狄の間にも亦同樣の關係が認められる。春秋時代に中國に侵入した外族の重なるものは戎と狄とであるが、戎の名は處々に見出されるのみか、全く種類の異るものにも適用せられた事實があるから、戎の名はこの頃から已に多少通稱に變じたものと推知せざるを得ない。之に反して狄の名を負ふ部族は戎に比するとその範圍が狹小であつて、之を中國の東と南とに據つた民族につけられた例は殆ど無いと云つてよろしい程である。それ故に蠻夷の中で漢人と始めに頻繁な交涉關係

を生じたのが東夷であつて、其の次に來たのが蠻であつた如くに、戎狄の中で初に烈しく中國に侵入したのは戎で、其の次に現はれたのは狄と見て大過はあるまい。さて然らば此の戎狄の本國は何處で、其の人種は何かといふに、其に就いては蠻夷の場合に於けるよりも稍〻多く手掛りの材料が得られる。後漢書(卷百十七)の西羌傳には春秋時代に中國に侵入した戎の顚末が記されてあつて、其の本國とその人種とを推定するに便宜を與へるものである、からそのの長文なのを厭はず、左に之を摘載して、之に考證を加へて見たいと思ふ。

及平王之末、周遂陵遲、戎逼諸夏、自隴山以東、及于伊洛、往々有戎、於是渭首有狄豲、邽冀之戎、涇水北有義渠之戎、洛川有大荔之戎、渭南有驪戎、伊洛間有楊拒泉皐之戎、潁首以西有蠻氏之戎、當春秋時、間在中國、與諸夏盟會、魯莊公伐秦取邽冀之戎、後十餘歲、晉滅驪戎、是時伊洛戎强、東侵晉魯、後十九年遂入王城、於是秦晉伐戎以救周、後二年又寇京師、齊桓公徵諸侯、戍周、後九年陸渾戎自瓜州遷于伊川、允姓戎遷于渭汭、東及轘轅、在河南山北者、號曰陰戎、陰戎之種遂以滋廣、晉文公欲修霸業、乃賂戎狄、通道以匡王室、秦穆公得戎人由余、遂霸西戎、開地千里、及晉悼公、又使魏絳和諸戎、復脩霸業、而蠻氏從楚、後陸渾叛晉、晉令荀吳滅之、後四十四年楚執蠻氏、而盡囚其人、是時義渠大荔最强、築城數十、皆自稱王、至周貞王八年、秦厲公滅大荔、取其地、趙亦滅代戎、即北戎也、韓魏復共稍并伊洛陰戎、滅之、其遺脫者皆逃走、西踰汧隴、自是中國無戎寇、唯餘義渠氏焉、至貞王二十五年、秦伐義渠、虜其王、後十四年義渠侵秦、至渭陰、後百許年義渠敗秦師于洛、後四年義渠國亂、秦惠王遣庶長操將兵定之、義渠遂臣於秦、後八

年秦伐義渠、取郁郅、後二年義渠敗秦師于李伯、明年秦伐義渠、取徒涇二十五城、及昭王立、義渠王朝秦、遂與昭王母宣太后通、生二子、至赧王四十三年、宣太后誘殺義渠王於甘原宮、因起兵滅之、始置隴西北地上郡焉、戎本無君長、夏后氏及商周之際、或侯伯征伐有功、天子封之以爲藩服、春秋時陸渾氏戎稱子、戰國世大荔義渠稱王、其哀亡之餘種皆反舊爲酋豪。

後漢書の編者は上の文に見える諸戎を西羌即ち今日の西藏種と見做したやうであるが、史記の匈奴傳に匈奴の由來を叙した處に「秦穆公得由余、西戎八國服於秦、故自隴以西有緜諸緄戎翟獂之戎、岐梁山涇漆之北有義渠大荔烏氏朐衍之戎」と書いてゐる所から之を見ると、司馬遷は此等の戎をも匈奴の類族と想像したのではあるまいか。已に前にも述べた如く、戎狄の二名も春秋時代から稍〻通稱の意味を帶びるやうになり、戰國時代には全然その義で使用せられることになつたから、司馬遷が匈奴の起原を記した處に現はれてゐる某の戎は必しも之を西戎の義に解すべきでなからう。又上に引用した後漢書の西羌傳の中に某の戎とあつても、其が必しも西藏種であると限らない。例へば趙に滅ぼされた代戎即ち北戎の如きは、又晉の魏絳が經略した諸戎の如きは、寧ろ後の胡貊といふ種族であつて、今日の蒙古或はTungguse種に屬し、義渠大荔などゝ同列に置くべきものでなからう。又之に反して史記の匈奴傳に記された緜諸、緄戎、翟獂などは所謂狹き意味の西狄であつて此等を北狄の一種たる匈奴に比すべきでない。之を要するに後漢書が西羌と見做したものゝ中には、北狄が混じてをり、又史記が北狄匈奴の類族と假定したものゝ中には西戎が收められてゐるやう

に思はれる。

春秋時代に戎と呼ばれた民族の性質を考察して、その人種を判定するのは、決して容易の業でない。然し彼等が當時據つてゐた住處と中國に侵入して來た徑路とを考證し、之に後世の歷史を參考するときは、此の問題に對しても大體の觀念は得られるやうである。史記の匈奴傳に記された縣諸戎の方位に就いては、其處に加へられた註に「正義曰括地志云、縣諸城秦州秦嶺縣北五十六里、漢縣諸道、屬天水郡」とあり、さうして其の現時の位置に關しては、讀史方輿紀要(卷五九)に「陝西省の鞏昌府に屬する西和縣は漢の天水郡の綿諸城で、此の縣の東北五十里の處に綿諸城がある」と記してある。又翟獂の戎に就いては、徐廣と後漢書の地理志とには之を天水郡に在るといひ、尙精しくは史記の註に「正義曰、括地志云、獂道故城、在渭州襄武縣東南三十七里、古之獂戎邑、漢獂道屬天水郡」と見え、又その現今の位置はと云へば、讀史方輿紀要(卷五十九)に鞏昌府の隴西縣の附郭は漢の獂道縣の地であつて、獂道城は府の東南二十五里の處に在るといふ。又義渠戎の地理に關しては史記の註に「正義曰括地志云、寧州慶州西戎、即劉拘邑城、時爲義渠戎國、秦爲北地郡」とあり、讀史方輿紀要(卷五十七)の慶陽府の條に「禹貢雍州地、周之先不窋所居、春秋時爲義渠戎國、秦滅義渠、以其地屬北地郡、漢初屬雍國、後仍屬北地郡」とあり、又その慶州の條にも「古公劉邑、秦秋爲義渠戎國、秦屬北地郡、漢爲北地郡及上郡地」とあつて、此の州の西北に義渠城があると記してある。又大荔戎に就いては、史記(卷五)の秦本紀に「厲王十六年塹河旁、以兵二萬伐大荔、取其王城」とあるから、大荔城が山西省と陝西

省との境を流れる河水の沿岸にあつたことは確かである。また史記の註に「秦本紀厲公伐大荔取其王城後更名臨晉」故地理志云「臨晉故大荔國也」正義曰「括地志云同州馮翊縣及朝邑縣漢臨晉縣地古大荔戎國今朝邑縣東三十步故王城即大荔王城」とあるから、大荔國が陝西省の同州にあつたことは爭はれない。然るに史記の匈奴傳によると、大荔は義渠と共に涇漆二水の北に在つたことに見えて、上にいふ所と合はない。思ふに大荔の本國は義渠などゝ同じく今の甘肅省の東境にあつたのであらうが、後に南下して河水の西岸に據つたのであらう。又烏氏に就いては、史記の註に「括地志云烏氏故城在涇州安定縣東三十三里周之故國後入戎秦惠王取之置烏氏縣」とあり、讀史方輿紀要(卷五十八)には平凉府の涇州の條に烏氏の名を擧げてゐる。又朐衍の戎に關しては、史記の註に「索隱曰案地理志朐衍縣名在北地正義曰括地志云鹽州古戎狄居之即朐衍戎之地秦北地郡」と見えてゐる。又冀戎は秦の武公の十年に縣となり、今の鞏昌府の伏羌縣に當り、邽戎も同年に縣に編入せられ、今の甘肅省の秦州の西六十里の地に當る。緜戎即ち犬戎の故國は今の西寧府の西北に位する樹敦城であつて、中國に侵入しては陝西省の鳳翔府の域內に據つたと云ひ傳られてゐる。又今の西安府の臨潼縣から東二十四里の處に驪戎城といふのがあり、春秋時代に驪戎の住んだ處と信ぜられてゐる。又河南省の河南府嵩縣の北から三十里の處に陸渾戎城といふのがある。春秋時代に陸渾戎のゐた遺跡と思はれる。揚拒泉皐伊洛の戎が河南省に侵入して洛邑の附近にゐたことは史記や後漢書の本文からも又その名稱の上からも推測せられるが、其の本國

が何處にあつたか、上に擧げた驪戎、陸渾などの如く全く不明である。

以上西戎に關する地理上の考證によると、春秋時代に中國に侵入した戎類の故鄉が大體に於いて漢代の北地、安定、隴西、天水の諸郡即ち今日の西寧、蘭州、鞏昌、平凉、慶安等の諸府であつて、殆ど青海、河水の東から陝西省の西界に連亙する山脈に至るまでの山地に當るとして差支はない。此等の戎人は此の地域から東南に突進して涇洛渭三水の流域に侵入し、その一部は更に東して山西省の南部と河南省の北部とに達したのである。さて然らば此等の戎人は果して何人種に屬したのであらうか。讀史紀要によると鞏昌府は春秋の時代には羌戎の據る所だといひ、階州は古の白馬氐の國に屬したといひ、寧羌州、臨洮府は春秋戰國時代に西羌の占領した處だといひ、蘭州、河州、岷州、西寧鎭は羌の地だといひ、寧夏鎭は春秋時代に羌戎の地だと推定を下してゐる（卷五十六、五十九、六十、六十二、六十四）此の推定に誤りのないのは、種々の方面から證據を擧げられるが、先づ第一に引用して之を示したいのは、後漢書（卷百十七）の西羌傳に「爰劍曾孫忍時秦獻公初立、欲復穆公之迹、兵臨渭首、滅狄獂戎、忍季父卬畏秦之威、將其種人謝落而南出賜支河曲數千里、絕遠不復交通」とある一節である。此の文面によると、秦の獻公の時に狄獂戎（即ち史記の翟獂）が渭水の上流域に據つてゐたのは確實である。たゞ此の戎と西羌の祖先たる忍とが如何なる關係であつたかは詳でないが、狄獂戎の部落が忍の部落と接近してゐたことゝ、其がやはり西羌の一種であつたことゝは推測するに難くない。余輩の此の考察はまた左に引用する魏略の文によつても確められる。

西戎傳曰、氐人有王所從來久矣、自開益州置武都郡、排其種人分竄山谷間、或在福祿、或在汧隴左右、其種非一、稱槃瓠之後、或號青氐、或號白氐、或蚺氐、此蓋蟲之類而處中國人、即其服色而名之也、……其俗語不與中國同、及羌雜胡同、各有姓、姓如中國之姓矣、其衣服尚青絳、其婦人嫁時着衽露、其緣飾之制有似羌、衽露有似中國袍、多知中國語、由與中國錯居也、其自還種落間、則自氐語、其嫁娶有似於羌、此蓋乃昔所謂西戎在於街冀狄道者也。

さて此の文の末尾に街冀狄道にゐたとある戎は、上に引いた後漢書の西羌傳に渭首にゐたとある狄豲邽冀の戎と全く同一であるから、街冀或は邽冀の戎も狄豲と同じく渭水の上流域に據つた西藏種の一部落と見て差支はない。たゞ魏略の云ふ所によるときは、狄豲も邽冀も均しく氐種であつた趣に見えるが、後漢書に從ふと狄豲の戎は羌の一種と解せられる。氐と羌とが加何なる點に於いて相違があるのか、支那の文籍に此の二稱が屢〻記載せらるゝにも拘はらず今に之を判定することが出來ない。從つて春秋時代に渭水の上流域を占領してゐた邽冀狄豲の二戎が、氐羌の何れに屬した種族であつたか、固より之を分別すべき途がない。然し其は何れにしても、此の二戎が今日の西藏種の中に數ふべき種族であつたのは、殆ど疑を容れない。

春秋時代に甘肅省の東部をなす山谷の地域に據つた西戎を氐羌と見た漢三國時代の學者の考は、亦此の方面の歷史地理の上からも、此の民族の風俗習慣の上からも援助を得るやうである。有史以前大むかしの事はいざ知らず、苟も歷史時代になつてから、此の地域が漢

人以外のものに占領せられたとすれば、それは蒙古、Turk、西藏の三民族を措いて他にあるまい。此の中蒙古人とTurk人とは平野曠原を好む游牧の民であつて、幽山深谷の地はその住地には適しない。之に反して西藏人はその本土故郷が高山峻嶺であるから、甘肅省の東部の如きは彼等が好んで住まふとする處である。後漢書の西羌傳に「其兵長於山谷、短於平地」とある一節は、氐羌の特色を善く描出したものである。且また黄河の上流域を本地とする氐羌が中國に侵入するには、甘肅省の東部に由るのを最も便とするが故に、古來戎狄が中原に伐ち込む大混亂の時代に、西藏種に屬する民族は多く此の山地を根據として陝西省に突進するのが常である。だから五胡の僭偽時代に長安に都して關中から起つたのが氐種の符堅であつて、其の滅びた後に之に代つたのも亦同種の姚萇であつた。此の時代に黄河の流域が蒙古種の匈奴羯、鮮卑と西藏種の氐羌とに分割せられた如く、五代から宋の一代を通じて、此の地域は初に蒙古種の契丹、後にTungguse種の女眞と西藏種の西夏とに分割せられた。歴史は或る程度にまで繰り返されるから、之と同樣の關係と形勢とが、春秋の時代にも現出したと假定するも、決して過言ではあるまい。此の時代の狄が蒙古種或はTungguse種であらうとの考察は、後に説く如しだとすれば、それと區別せられた戎は、西藏種に屬する民族であらうと想像するも、決して無理なことはなからう。

春秋戰國時代の西戎が大體に於いて西藏種であらうとの考察は、その一種たる義渠戎の間に行はれた風習の上からも一つの證明が得られる。列子の湯問篇第五に「秦之西有義渠

國者、其親戚死、聚柴積而焚之、燻則煙上、謂之登遐、然後咸爲孝子」といふ記事があり、又之と同樣の文句が墨子の節葬篇下第二十五の處にも見えてゐる。是は明かに春秋或は戰國時代に義渠國に火葬の儀式が行はれた事實を語るものである。戰國時代に氐羌の間に此の風俗のあつたことは、荀子の大略篇に「氐羌之虜也、不憂其係累也、而憂其不焚也」とあるのでも推測せられる。漢代になつても此の風習は氐羌民族の間に遺つてゐたと見えて、後漢書(卷百十六)の南蠻傳冉駹夷の條に「冉駹夷者武帝所開、天鼎六年以爲汶山郡、至地節三年、以立郡賦重、宣帝乃省并蜀郡、爲北部都尉、其山有六夷七羌八氐、各有部落、其王侯頗知文字、而法嚴重、貴婦人、黨母族、死則燒其尸」といふ一節がある。火葬は世界に廣く流行する風俗の一であるから義渠にこの風俗があつたからと云つて、此の西戎が氐羌の一種だと決定するのは、聊か速斷の嫌があるかも知れぬ。然し當時義渠に隣接する民族の中で匈奴、烏孫、月氏、漢人等の間に此の葬式が行はれたといふ事實は、此の西戎を氐羌の一種と見る議論に有力な證據を供するものである。義渠は今の甘肅省の東部に據つた西戎の中で最も北に位したものと思はれ、而も其が氐羌の一種に相違ないとすれば、其より南方に當つて西藏の高原に連續する地域に據つた西戎は尙さら同種類と見做さるべきである。義渠が中國に併合せられてから、漢人で多少之に關係を有するものゝ中には、此の名を姓とするものがあつた。例へば後漢書(卷百十七)の西羌傳の中に義渠安國の名が見えて、其處に「至宣帝時、遣光祿大夫義渠安國覘行諸羌」といふことが

記されてある。義渠を姓とした安國が諸羌偵察の任に選ばれたのは、果して偶然の事と見るべきか。思ふに安國なり、其の父なりが元來義渠種の人で、羌人を安撫するのに便宜を有するからでは無かつたらうか。又こゝに安國と稍〻趣を異にしてゐる人に、公孫賀といふ者があつた。その事は史記(卷百二十一)に「賀義渠人也、其先胡種、賀父渾邪、景帝時爲平曲侯」とある一節である。さて此の文を輕卒に讀んで、公孫賀は義渠人であつて、其の先代が胡種即ち匈奴種で、其の父を渾邪といふからには、義渠は元來匈奴の類族で、氐羌の一種と見做すべきでないと心得る者が無いとも限らない。然し其は誤解である。此の文の眞意をいふと、公孫賀は義渠といふ處に生れた人で、其の祖先は匈奴種だといふに過ぎないから、史記の此の記事は決して義渠を氐羌種とする余輩の議論に支障を與へるものでない。

春秋時代に關する文獻に戎の名は頻繁に見えるのに拘はらず、その風俗習慣を窺ふべき記事は甚だ稀である。その點から考へると、左氏傳に「周平王之東遷也、大夫辛有適伊川、見被髮而祭於野、曰不及百年、此其戎乎」とある文は甚だ貴いことになる。當時河南省に侵入した戎類は被髮の民であつたのが知られるからである。又孔夫人は管仲が齊の桓公を輔けて戎狄を逐ひ攘つた功績を賞讃して「微管仲則吾其被髮左衽哉」と云はれた。春秋時代に中國に攻め入つた戎狄の主なるものは戎であつて、而もそれが被髮左衽の人であつたのが窺はれる。漢時代の西羌に被髮の風が行はれた例證は乏しくないが、中にも後漢書の西羌傳には此の風習の起原に關する面白い傳說が左の如くに載せてある。

羌無弋爰劍者、秦厲公時爲秦所拘執、以爲奴隸、不知爰劍何戎之別也、後得亡歸、而秦人追之急、藏於巖穴中、羌人云爰劍初藏穴中、秦人焚之、有景象如虎爲其蔽火、得以不死、出又與劓女遇於野、遂成夫婦、女耻其狀、被髮覆面、羌人因以爲俗、遂俱亡入三河間。

此の話は因より歷史上の事實でなく、被髮の由來を說明した說話に過ぎない。しかし此の習俗があればこそ此の說話が起つたのであるから、後漢書の此の一節は羌族に被髮の風が行はれた有力の證據と認められる。尙同じ傳の滇良羌の條に「建武九年隗囂死、司徒椽班彪上言、今涼郡皆有降羌、羌胡被髮左衽、而與漢人雜居」とあるのは、羌族が被髮の民であつたのを明記した文面である。被髮左衽は野蠻人の間に廣く行はれた風俗であるから、たゞ此の一事を以て被髮の戎は即ち西羌だと斷定するのは、甚だ危險に思惟せられるかも知れない。然し戰國末から漢代に亙つて支那の北方に據つた東胡、匈奴などは春秋時代の狄に擬すべきものであるが、前者は髡髮、後者は辮髮であつたとすれば、被髮左衽の西戎を漢代の西羌即ち今日の西藏種と推定して毫しも無理はあるまい。

春秋時代に戎の名で呼ばれた民族が大體に於いて西藏種であるのは、叙上の如くであるが、此の名稱は當時から已に幾分か廣汎の意味を帶びて來て、他の民族をも此の名で稱へた場合が尠くない。然るに此の戎と或る程度にまで截然と區別せられたのは狄であつて、此の名の範圍は戎の如くに廣くない。さて此の戎が已に大體に於いて西藏種だと一決すれば、之と區別せられた狄は主として何人種に屬したのであらうか。此の疑問に對しては文

獻不足の爲に直に明快な答解を與へることは出來ないから、やはり戎の場合に取つたと同じ方法によつて、先づ狄が中國に侵入して占領した地域を考證し、さて然る後にその由つて來た所の方面とその人種とを推斷する外に途はないと思ふ。國語をよむと「桓公西征、攘白狄之地、遂至于西河也」といふ一節がある。茲に西河とあるのは只今の陝西と山西との間を流れる黃河を指したのであるから、白狄が桓公の時代に山西省の側で、しかも此の河水を距る遠くない處に據つてゐたことだけは推される。また史記(卷百十)の匈奴傳に「晉文公攘戎翟、居于河西圁洛之間、號曰赤狄白狄」といふ文句が見える。此の地名に關する史記の註を列擧すると、「徐廣曰圁在西河音銀、洛在上郡馮翊間」「索隱曰、三蒼圁作圜、地理志云、圁水出上郡白土縣西、東流入河」「正義曰、括地志云、白土故城在鹽州白池東北三百九十里、又云、近延州綏州銀州、本春秋時白狄所居」とある。此等の考證に從へば、狄が文公に逐はれて定住した處は、山西省の西部と陝西省の東北部とにあつたことになるが、その以前はもつと東にゐたものと見なければならぬ。春秋の時代に狄種で國を中原に建てたものは尠くない。此等の國々の事に就いては、既に支那の學者の考定があるから、茲に便宜のため之を一括して記すと、鮮虞は白狄、今の正定府の西北四十里(支那里)の處に鮮虞亭といふがある。獲麟後百八十六年に趙に滅された。肥も白狄、今の正定府の藁城縣から西南七里の處に肥纍城といふがある。晉に滅された。鼓も白狄、今の平定府に屬する晉州に該當し、晉に滅された。又甲氏は赤狄、今の廣平府に屬する鷄渾縣の域內に在つて、晉に滅され、東山皐落氏も赤狄、今の絳州垣曲縣の西

北六十里に皐落鎮といふのがあり、また平定府の樂平縣の東七十里に皐落山と呼ぶのがある。晉に滅された。潞氏も赤狄、今の潞安府の潞城縣に當り、晉に滅され、留吁も赤狄、今の潞安府の屯留縣の東南十里に位する純留城に當り、鐸辰も赤狄、潞安府の域內にあり、廧咎如も赤狄で今の太原府の境內にあつたと信ぜられてゐる。又讀史方輿紀要(卷四十四)によると山西省の大同府は春秋時代に北狄のゐた處、陝西省の延安府は此の時代に白翟の據つた處で、秦の時に上郡に屬し、漢の初に狄國に屬し、次でまた上郡に編入せられたとあり(卷五十七)、鄜州は白翟の地で秦の時には上郡に屬し、漢の時には上郡と馮翊とに當るとあり、綏德州も白狄の地で戰國の時代に魏に屬し、後に秦の有となり、上郡をこゝに置き、漢の初には狄に屬し、後に上郡と爲されたとある(同卷)。以上漢土の學者が考定した所のものが、果して悉く正鵠を得てゐるか否かは斷言し難いとするも、春秋の時代に中國に侵入した狄に赤白の二種があつて、今の山西省を中心とし、東は直隸省の西部、西は陝西省の東北部に散在したと了解すれば、大體に於いて間違はない。

春秋の時代に狄種が中國に於いて占領した區域が既に上述の如しとすれば、次に考究を要するのは、此の民族が何れの方面から來た何人かといふ點である。黃河の中流域に起つた漢國の東にゐた夷とその南にゐた蠻とが大體に於いて漢人の類族であり、又其の西にゐた戎が主として黃河の源流域から甘肅省の東部を經て中國に侵入した西藏種であつたとすれば、山西省と直隸省の西部とに伐ち入つた狄は、今日のTungusse人、蒙古人、Turk人を措いて

他に之を求めることは出來ないであらう。世界の民族の住處には時々移動があつて必しも一定不變のものでないから、今を以て古を律するわけには行かないが、前漢時代に於いても今日の如くに、Tunguse 蒙古、Turk の三人種が互に次第して東方から西方にかけて支那の長城以北に據つてゐたとすれば、春秋戰國時代に於いても此の位置形勢に大差はなかつたものと見てよろしからう。此の時代に中夏の諸侯で極東に位したのは燕齊魯の三國であつて、當時燕の北方面から山戎といふ民族が屢〻齊魯を犯したことが左傳に記されてある。山戎の名義に就いては前にも述べて置いた通りに、決して其の原名でなく、漢人の方から燕の北方に連亙する山地より南下する異族を呼んだ俗稱に相違ない。然らばその眞實の名稱は何かといふに、恐くは貊であらう。山戎とは此の民族の最南に位した山間の貊の一種を指した名と見て差支はなからう。此の貊に就いては故那珂博士の貊人考(外交繹史卷之二、第九章)に精しく考證せられてあるから、更に之を說く必要は無いが、余輩の議論に關する處だけを引用すると貊は說文に貉と書いて「北方豸種也」とあり、魯頌に「淮夷蠻貊」、論語に「蠻貊之邦」、大學に「蠻貊」、周禮夏官職方氏に「四夷八蠻七閩九貉五戎六狄」、墨子兼愛中篇に「商夏蠻夷醜貊」、孟子に「夫貉、五穀不生、惟黍生之」とあり、又大雅韓奕の詩に「王錫韓侯、其追其貊、奄受北國、因以其伯」とあつて、貊は春秋戰國時代に中國の東北にゐた民族の中に於いても最も著名のものであつたに相違ない。而も此の貊は上にもある如く蠻貊と熟字して當時已に此の方面の異類を呼ぶ泛稱に變じたかの觀がある。漢書の禮樂志に「隅辟越遠、四貉咸服」とある文句な

どに於いては、貉即ち貊は全く四方の外人を指す通稱に使用せられたのである。此の如く貊人が周の一代を通して漢人に熟知せられたのは、その住地が漢土と接近して、貊人と漢人との間に頻繁なる交渉關係の持續せられたのを證するものである。史記の匈奴傳に「趙襄子踰句注、而破幷代、以臨胡貉」といふ一節がある。余輩の知る限に於いては、戰國から後漢までの記錄に胡とあるのは專ら匈奴、東胡などの如き今の蒙古人或はその雜種をさした名稱であるから、それと區別せられた貉は之と種類を異にした民族を呼んだ名稱と見做して差支はなからう。また余輩の考證した結果によると、戰國時代に代即ち今の大同府の北に據つてゐたのは胡であるから、趙襄子の頃にも此の形勢に變りがなかつたとすれば、幷州即ち今の直隷者の北部に住んでゐたのは、貉であらうといふ推定はつく。さうして漢人が只今の北京から東北南滿洲の方面に發展した年代は固より的確に知るよしもないが、燕が之を占領して此處に遼東遼西等の諸郡を置いたのは戰國末のことであり、又漢代から東晉頃まで盛京省の北と東とに據つてゐたのが扶餘といふ穢貊であり、また其より南鴨綠江の流域と朝鮮の咸鏡、江原の二道とに住んでゐたのが高句麗、沃沮、穢貊であつて、此等も亦扶餘の類族であつたとすれば、春秋の時代若しくはその以前に、北京の北遼東遼西に土着した住民も、やはり貊種であらうと考へても決して無理はないと思ふ。まづ斯樣に戰國以前に於ける漢土の東北方の形勢を想像して見ると、春秋の時代に北京の北なる山地を經て貊が中國の東部に侵入した理由もよく了解されるし、又此の時代に齊魯の地に攻め入つた山戎がその

一種であらうといふ説も、充分の根據を得ることになる。

既に前に論證した如く、春秋の時代に黄河の源流域から甘肅省の東部を經て中國の西部に侵入した戎が大體に於いて西藏種であり、又同し時代に遼河の流域から直隷省の中部に連亙する山脈を越えて中國の東部に侵入した貊がTungus種であるとすれば、此の兩者の中間に位して重に山西省に侵入した狄は蒙古人かさなくばTurk人かでなければなるまい。余輩の研究によると、Turk人の發祥地は天山とAltai山との間であつて、其の一種と見らるゝ月氏や烏孫は其處から東南に下つて河西の地に據つたのであるが、此等の民族が記錄に現はれたのは秦漢の際であるから、春秋時代に此の方面が果してTurk種の住處となつてゐたかどうかは全く不明である。又Herodotusの歴史によるとAltai山の北に位する山地にはSamojed, Yenisei,蒙古等の諸族がゐた形跡はあるが、未だTurk人が據つてゐた證據はない。漢代になるとBaikal湖の南Selenga河の流域に呼揭と丁令、Yenisei河の上流域に堅昆がゐて、多少Turk種の分子を包容した民族のやうに思はれるが、春秋時代に其が果して同樣であつたかどうかは未だ詳でない。又蒙古人の發祥地はBaikal湖と興安嶺との間なる黑龍江の源流域であるが、その南下したものは陰山山脈を根據地としたやうに思はれる。だから春秋の時代にTurk人が支那に侵入するには、その西境若くは西北境に由るのが便利であるに反して、蒙古人はその北境に由るのが順路であつたに相違ない。かやうな地理上の理由から考へると、春秋時代に山西省に侵入した狄は、主として陰山に住居した蒙古人の南下したも

のと推測するのが妥當の見解であらう。況して戰國から漢の頃まで陰山の南北に割據した匈奴、樓煩、河南、林胡等の諸族を蒙古種とする余輩の研究の結果は、この考察を一層確めるものである。然らば周の一代を通じてTurk種の民族は遂に中國に來攻したことは無いかといふに、其は必しも然らずと答へたい。時代は降るが、五胡僭僞の際に氐羌は西藏種、匈奴、羯、鮮卑は蒙古種を骨子として之にTunguse種を和味した雜種であるが、尙この外にTurk種の丁令即ち勅勒が活躍した例などを考へると、春秋の時代に西藏種の戎と蒙古種の狄と、Tunguse種の貊との外に、亦Turk種の來侵は果して無かつたであらうか。余輩は支那の古代史に有名な玁狁或は獯鬻をその一種と見たいのである。

五　玁狁、獯鬻

さて此まで述べ來つた論證に若しも誤謬がないとすれば、漢人が四裔の民を呼んだ蠻夷戎狄の中、蠻夷は漢人と同種或はその類族と思はれ、戎は大體に於いて西藏種、狄は主として蒙古人と考へられるが此の四稱は元來漢人の方から稱へたものか、但しは蕃名の漢譯か、その邊は未だ詳かでない。然るに春秋戰國の文籍に玁狁とも獯鬻とも呼ばれた戎狄の一種が記されてある。前者は亦猃狁とも書き、後者は亦葷粥、薰育とも書いて、その文字の一定しない所から之を見ると、此等は元來土言であつて之を音譯したものと推測せざるを得ない。たゞその人種に就いては未だ定論がない。史記(卷百十)の匈奴傳の發端に「匈奴其祖先夏后

氏苗裔也、曰淳維、唐虞以上、有山戎、獫狁、葷粥、居于北蠻、隨畜牧而轉移」といふ匈奴の由來を記した文句がある。此の文面では、山戎、獫狁、葷粥が匈奴の前に朔漠の游牧民であつた趣には聞えるが、彼等が匈奴の祖先であつたか否かは明瞭でない。然るに其の註を見ると「應劭風俗通曰、殷時曰獯粥、改曰匈奴、又晉灼云、堯時曰葷粥、周曰獫狁、秦曰匈奴、韋昭曰、漢曰匈奴、葷粥其別名、淳維是其始祖、蓋與獯粥是一也」とあり、又同書(卷一)の五帝本紀に見えた葷粥の註に「索隱曰匈奴別名也、唐虞以上曰山戎、亦曰薰粥、夏曰淳維、殷曰鬼方、周曰玁狁、漢曰匈奴」とあつて、漢以後の學者は多く山戎、葷粥、玁狁、獫狁、獯粥を同一種の時代によつて其の稱呼を異にしたものに過ぎないと解してゐる。さて此等の名稱の中玁狁と獫狁、葷粥と薰粥とが、何れも同名の異字なのは言までもないが、索隱に淳維は夏の時に匈奴を呼んだ別名だとあるのは全く誤解である。上に引用した如く史記の匈奴傳の眞初に「匈奴、其先祖夏后氏之苗裔也、曰淳維」とある文を輕卒に讀み下すと、淳維は匈奴の別號のやうにも解せられるとしても、其の後の文に「自淳維以至頭曼千有餘歲」とあるのを見れば、淳維が匈奴の始祖たることは甚だ明瞭であつて、必しも韋昭の言を待たないのである。前漢時代の學者の中にも葷粥を匈奴の古名と見做した者もあつたと見えて史記(卷六十)の燕王策には葷粥は匈奴の雅稱として用ひられてある。

葷粥はまた獯鬻とも書く、同名の異字に過ぎない。さうして此の名が文獻に現はれたのは孟子(卷二)梁惠王章句下に「齊宣王問曰、交鄰國有道乎、孟子答曰、有、惟仁者爲能以大事小、是故

湯事葛、文王事昆夷、惟智者爲能以小事大、是故大王事獯鬻、句踐事吳」とあるに見えるのが始である。然るに同章の他の處に「昔者大王居邠、狄人侵之、去之岐山之下、居焉非擇而取之、不得已也」とあるから、大王を犯した狄人が獯鬻であつたのは、前文と對照すれば自ら知られる。此の獯鬻が北狄の一種であつたことは、逸周書(卷十)の周書の序に「文王立、西距昆夷、北備獫狁」とあり、衞宏の毛詩序に「文王之時、西有昆夷之患、北有玁狁之難」とあり、又後漢書(卷百十七)の西羌傳に「及文王爲西伯、西有昆夷之患、北有獫狁之難、遂攘戎狄而戍之、莫不賓服」とあるによつても明白である。然るに詩經の小雅に南仲といふ人の玁狁を征伐した事蹟が九章の詩篇となつて歌はれてゐるが、その第三章に「王命南仲、往城于方、出車彭々、旂旐央々、天子命我、城彼朔方、赫々南仲、玁狁于襄」とあり、又第四章に「喓々草蟲、趯々阜螽、未見君子、憂心仲々、我心則降、赫々南仲、薄伐西戎」とある。此の二章は明かに同一事件を咏じたものであるから、後者に西戎とあるのは前者の玁狁を指したに相違ない。かやうに考證して來ると、玁狁は北狄とも西戎とも呼ばれたといふことになる。南仲が玁狁を防禦する爲に築いた朔方城の位置に就いては、學者の意見が區々であつて未だ定說はない。蒙古游牧記(卷六)の著者張璞は之を鄂爾多斯の北邊に置かれた漢代の朔方縣に考定し、王國維は之を陝西省の洛水の沿岸にあつたと推測してゐる(鬼方昆夷玁狁考、國學叢刊乙卯二)。それは何れにしても、朔方城はその名義から考へて、周の都から北方に位したことだけは確かである。從つて此處をめがけて伐ち入つた玁狁が、北方から押し寄せて來たことは許さねばなるまい。さてかうなると、詩經に此

の外敵を西戎と稱してゐるのは、聊か解し難いやうに聞える。そこで鄭氏は此の西戎は昆夷を指したもので、之を北狄玁狁と見做すべきでないと主張し、又孔氏はその詩疏に玁狁は西戎よりも強大であつたから、周が軍師を出したのは主として玁狁を伐つ爲であつて、西戎の方は附屬の事件たるに過ぎないと說いてゐる。然るに崔東壁は此等の說に反對して云ふのに「章中の太原(即今陝西固原)と方とは何れも周の西北に位したと思はれるから、玁狁の國は恐くは凉鞏の邊にあつたのであらう。文中の西戎は即ち玁狁を指したに相違ない。玁狁が周を侵かした事實は出車、六月、采薇采芑の四篇に由つて明白であり、周の患を爲したものは何れも戎であるから、玁狁も亦戎であり、又周の厲王宣王の二代に亙つて中國を侵かしたのは、獨り西戎であるから、詩經の玁狁も定めて西戎である。一篇の詩の中に於いて或は玁狁といひ、或は西戎と云つてゐても、畢竟するに同一の民族を指したもので、之を兩事と見做べきでない。蓋し西戎の國には幾つもあつて一つでないが、その中に於いて最も强盛なのは玁狁であつたから、專らに之を言ふときには玁狁と書き、概して之を言ふときには西戎と稱したに過ぎないと論じてゐる(崔東壁遺書第二冊豐鎬考信錄卷七)。前にも述べた詩經の小雅にある九章は專ら南仲の玁狁征伐を咏したものであるから、其の三章の玁狁は固より第四章の西戎である。たゞ此の西戎を防ぐ爲めに朔方に築いたのは何故であるか、此の點は未だ崔氏によつても充分に說明せられてない。又此の詩の中に薄伐玁狁至于太原」といふ文句がある。崔氏は之を今の固原と斷してゐるが、其の理由は述べてない王國維は

之を陝西の洛水の左右に考定してゐるが、その論旨は未だ讀者を首肯せしむるに足りない。孔傳によると、高平を太原といふとあるから、詩經の太原は今の鄂爾多斯を指したとも解せられる。それは何れにしても玁狁が周の正西から伐ち込んで來たでないのは事實と見て差支はない。周の大王が今の涇水の上流域に據つてゐた所が獯鬻に攻められて南方の岐に遷つたといふ古傳說に、多少歷史上の事實が包含せられるとすれば、獯鬻は多分今の平凉或は慶陽の方面から襲來したものと解せられる。若しも此等の考察に誤がないとすれば、玁狁を西戎と書いたからと云つて、その國が必しも周の正西にあつたとは限らないと同樣に、獯鬻を北狄と稱へたからと云つて、其の國は必しも周の正北にあつたとは信ぜられない。想ふに玁狁と獯鬻とは同名の異字で二國でなく、之を西戎と稱へても其が元來の戎でなく、之を北狄と呼んでも、其が元來の狄でなく、事實は周の西北から周に侵入した一種の外民族を指したのではあるまいか。

詩經の玁狁と孟子の獯鬻とが同一の民族をいふ二稱に過ぎないのは、第一にその音聲の類似、第二に其の侵入して來た方向の同一なので察せられるが、此處にまた玁狁と同樣に周の患となつた民族に混夷といふのがある。詩經の大雅に「肆不殄厥愠、亦不陨厥聞、柞棫拔矣、行道兌矣、混夷駾矣、維其喙矣」とあるはその例證である。此の混夷征伐の事に關しては、古來之を文王の時とする說と大王の時とする說とがあるが、孟子が齊の宣王に答へた言の中に文王は昆夷に事へ大王は獯鬻に事へたとあり、逸周書に文王は西昆夷を距ぎ北玁狁に備へ

たとあり、又後漢書の西羌傳に文王の時に西に昆夷の患がなり、北に獫狁の難があつたといふ記事から之を考へると、混夷征伐が文王の時にあつたことは拒まれない。さうして此の混夷即ち昆夷が玁狁でもなくまた獯鬻でもないのは、上の三書が此の兩者を截然と區別してゐるので斷言せられる。然るに王國維は此の混夷の名を獯鬻或は玁狁と同一だと考へ、之を二民族と見る論者の妄なるを力說してゐる。其の論旨の大要を述べると、詩經の混夷は孟子の昆夷、史記の匈奴傳の緄夷、鄭玄の尙書大傳の註にある畎夷と同名である。さうして昆夷の古音を稽へるに、漢書の武帝紀に匈奴の小王に昆邪王とあるのを、同書の食貨志と霍去病傳とには渾邪王に作つてゐるから、昆字の古音は渾と同じである。昆が已に渾と變じたとすれば、史記の五帝本紀と三王世家とに見えたる葷粥も、周本紀の薰育も、孟子の獯粥もさては詩經の玁狁も皆同名の異字に外ならぬと論じ、又更に言はく、孟子や逸周書などに昆夷と玁狁とを區別して配してある處から、多くの學者は之を二民族と思惟するが、其は恰も詩經の小雅に南仲の功業を贊美した章に玁狁と西戎とを擧げて而も其が同一民族を指したのと同じやうに修辭上の要求から昆夷と玁狁とを揭げたに過ぎない。且つ昆夷の住所も玁狁のそれの如く隴濱の西、安定の山谷を包容した地域であるから、其の點から見ても昆夷が玁狁、獯鬻と同一民族であつたことが推知せられると說いてゐる(鬼方昆夷玁狁考)。昆の古音が渾と同じだといふ王氏の考は爭はれないが、だから昆夷は即ち玁狁だといふ結論は生じて來ない。昆夷の名は同氏も說いたやうに昆夷、緄夷、畎夷などと稱して常に一字

で書かれてゐるに反して玁狁は獫狁とも葷粥とも薰粥とも葷粥とも書かれて常に複稱となつてゐる。是は確かにその同一の民族でない一つの證據である。且つまた王氏は孟子や逸周書などに昆夷と玁狁とを擧げたのは修辭上の必要から故意に同一民族をいふ異稱を用ひたに過ぎないと論じてゐるが、如上の書物には常に西は昆夷、北は玁狁と明瞭に其の據つた方位を示してある以上、之をしも同一民族と見るのは甚だ困難である。是は其の同一民族でない第二の理由である。國語によると周の穆王が征伐した西戎に犬戎といふのがある。史記に從うと、周の幽王を襲うて之を滅したのは此の戎である。漢人の考證によると、犬戎が中國に移つて來て住居した處は陝西省の鳳翔縣の北境で、その本國は甘肅省の西寧府の西北に位する樹敦城であるといふことだが、其が果して正鵠を得てゐるかどうかは詳でない。それは何れにしても、犬戎は戎の一種で西藏種に屬する民族であらうと思はれる。犬の字音は ken であるが、その現音は k'uan 廣東音は hün であるから昆字と音聲の類似がある。想ふに犬戎は昆夷即ち緄戎であらう。昆夷が已に犬戎で西藏種であるとすれば、之と區別せられた玁狁は他の種類の民族でなければなるまい。是は昆夷が玁狁でないといふ第三の理由である。

玁狁即ち獯鬻が已に西藏種の戎でないとすれば、此の民族は果して何人種に屬したのであらうか。これまで漢土の學者は獯鬻の音聲が匈奴のそれと酷似すると考へたので、此の兩者を無論同一のものと速斷して、その間にまた何等か疑を容れないのである。然しなが

ら淮南子の齊俗訓に「玁狁之俗相反、皆慈其子、而嚴其上、胡貉匈奴之國縱體拖髮」とある文を見ると、獫狁即ち玁狁は匈奴と分別せられてゐる。淮南子の著者劉安は漢武帝と時代を同じくした人であつて、獫狁と匈奴とを區別するに反して、之と殆ど同時に作られた史記の燕王策には、葷粥即ち玁狁を匈奴の古稱と見做してゐる。是によつて之を觀ると、前漢時代に於いても、匈奴と玁狁との同異に就いては、學者の間に異說があつて、未だ一定してゐなかつたことが推される。然るにこゝに匈奴と玁狁とが別種の民族であるのを證する一つの例證がある。其は賈誼の著はした新書(卷四)の匈奴篇に見える左の一節である。

將必以匈奴之衆、爲漢臣民、制之令千家而爲一國、列處之塞外、自隴西延至遼東、(別本延下有安字)衍、各有分地、以衞邊、使備月氏灌窳之變、(灌窳疑當作窳渾、縣名在朔方郡、皆屬之直郡、然後罷戎休邊、戎疑當作戍)民天下之民、帝之威德內行外信、四方悅服……竊聞匈奴當今遂羸、此示武昧利之時也、而隆義渠東胡諸國、又頗來降。

此の文中に見える灌窳こそは實に玁狁問題を解決する鍵鑰を與へるものである。此の灌窳は已に桑原博士の說かれたやうに史記の匈奴傳と魏志に引用した魏略の渾窳と同一である(張騫の遠征四十一頁)。さて然らば此の國は何處に在つたかといふ疑問は直に起つてくる。漢書(卷九十四上)の匈奴傳には冒頓單于が東方に於いて東胡を滅ぼし、西方に於いて月氏を破り、南方に於いて樓煩白羊河南王を併せたる次第を叙した後に「北服渾窳、屈射、丁零、隔昆、龍、新犂之國」と記し、又史記の匈奴傳には之を「後北服渾庾、屈射、丁零、

隔昆薪犂之國」と書き、又魏志(卷三十)に引用した魏略には「匈奴北有渾窳國、有屠射國、有丁令國、有隔昆國、有新梨國」と見えてゐる。此處に列擧した國々の中で、その確かに知られるのは、丁零と隔昆とである。丁零は後の鐵勒でSelenga河の流域に住み、隔昆は後の堅昆、黠戛斯(Kirgis)でKem河の流域に據つた國である。屠射の位置は明かでないが、逸周書の王會解にある姑他と類似があり、共に漢代に天山の東部に據つた姑師に擬すべきものではないか。漢書の龍は逸周書の其龍の省略と思はれ、その薪犂は史記の薪犂、魏略の新梨、逸周書の爕犂と同名であるが、その方位に就いては全く不明である。然るに漢書魏略の渾窳、史記の渾庾は新書の灌窳と同名であつて、その方位も稍々推測ができると思ふ。新書の註釋家は本文の灌窳を漢の朔方郡に屬する窳渾縣の名の倒置であらうと疑つたのであるが、余輩は却て漢書地理志の窳渾縣こそ渾窳の轉倒であらうと考へる。此の縣のことは漢書(卷二十八下)の地理志に「朔方郡元帝元朔二年開、西部都尉治窳渾」とあり、さうして此の窳渾縣の條には「有道出鷄鹿塞、屠申澤在東」とあるから、その位置を推定するに手懸がつく。そこで王先謙の漢書の補註に「河水註云、河水自沃野來、又北屈而南河出焉、河水又北迤而溢於窳渾縣故城東、武帝開朔方郡縣、即西部都尉治、其水積而爲屠申澤、澤東西百二十里、闞駰謂之窳渾澤矣、又屈而東流、爲北河、衞青絕梓嶺梁、北河是也、下入臨河、南河下入臨戎、一統志、故城今套外西北、河北河折東之處、屠申澤番地騰格里淖爾」といふ考證がある。之に據ると、漢の窳渾縣は今日の騰格里淖爾(蒙古語 Tengeri nôr 天泊の義)の西に置かれたのである。窳渾の名は漢語としては何等の意味を

爲さないから、蕃語の音譯に相違ない。漢代に於いて北邊の地名に外國名を採用した例は決して尠くない。例へば此の嵐渾縣の東に隣接して而も亦朔方郡に隷屬した縣に渠搜縣といふのがある。是は禹貢の九州の一つ雍州にゐた西戎の一種渠搜の名を取つて附けたものである。尙此の外漢代の武威郡に休屠縣があり、安定郡に烏氏縣、月支道があり、天水郡に緜諸道、貈道があり、北地郡に義渠道があり、上郡に龜茲道があり、雁門郡に樓煩縣があり、張掖郡に驪軒縣があつて、何れも其の名で知られた外國に因んで命名せられたものに相違ない。朔方郡の嵐渾縣も恐らく此の種類の名稱であつて、嵐渾といふ民族なり國家なりに多少緣故があるによつて起つたものであらう。而して此の名と類似のものは上に擧げた渾嵐國であるから、漢廷の史官が何等かの誤解か理由かによつて之を倒置し嵐渾と書いたのであらう。若しも此の推察が許されるならば、此の嵐渾縣(實は渾嵐縣)は賈誼の新書に見えた灌嵐と關係がつくのである。賈誼が新書を著はしたのは文帝の時であつて、その頃月氏はまだ河西に據り匈奴は陰山を擁し、東胡は匈奴に降服して遼河の上流域を占領してゐたから、匈奴の北にゐた渾嵐即ち灌嵐が漠北から中國に攻め入るのには鄂爾多斯の西北に由る外に便宜の道はない。かやうに考へて見ると、鄂爾多斯の西北騰格里淖爾の附近に嵐渾縣が設置せられたのには、渾嵐人が此處を通過したとか、此の場所を占領したとか、其の來寇を此處で防禦したとか、其の他何等かの歷史上の理由があつたらうと思はれる。渾嵐の住地は何處に在つたか、固より之を的確に推定する史料がない。然し冒頓單于が漠北に於い

て討平した國々の中で丁零は Selenga 河の流域に住み、隔昆は Yenisei 河の上流域に據つてゐたことだけは確かである。又漢書の匈奴傳によると郅支單于が征伐した國に烏褐といふのがあつて、其は後世の回鶻と同名で Selenga 河に據つてゐたものと思はれる。Oryon, Tola 二水の流域は漠北に於いて最も樞要な地域で、蒙古に起つた有力の君主は必ず之に據るのを例とするから、冒頓の如き英主が之を他人の手に委ねて置くやうなことは萬々無いと信ずる。して見ると此の方面に渾窳の如き勇悍な民族を求めることは出來ない。然らば匈奴の西と西北とに當時如何なる民族がゐたかと云ふに、河西の地には月氏烏孫が居り、天山の東部には姑師が居り、其が昌頓が討伐した屈射に比定せられるならば、渾窳の住地として遺されるのは、天山と Altai 山との間を措いて他に之を索めるのは困難である。若しも渾窳が Altai 山にゐたとすれば、漢の朔方郡は鄂爾多斯の西北に位して此の山脈の東端と相望んでゐるから、渾窳が南下して中國に攻入らうとするときには、先づ此の地に由るのが順路である。さて此處から更に南して賀蘭山の左右に腰を安えて根據地となし、機會を窺つて陝西省の西北から渭水の流域に侵入したのであらう。周の大王を涇水の上流域に攻めたと云ふ獯鬻も、周の厲王宣王の時に南仲が征伐したといふ玁狁も共に此の渾窳ではなかつたらうか。詩經に之を西戎と呼んだのは其の住地が稍々西に傾いてゐたからであり、孟子に之を北狄と稱へたのは其の住地が稍ゝ北に傾いてゐたからであつて、其の實際は周の西北に當つてゐたのであらう。さうしてその人種は蒙古種の狄でもなく又西藏種の戎でもなか

つたのではあるまいか。

漢代の灌窳即ち渾窳が已に周代の玁狁即ち獯鬻であるとすれば、其は果して今の何人種であらうか。從來周代の玁狁、獯鬻が匈奴の祖先と思惟せられた一つの理由は、其の音聲が互に類似すると信ぜられたからであるが、それが果して實際であらうか。なるほど玁狁の現音は hienyün であり、獯鬻の現音は hünyü であるから、其が匈奴の hiong-nu と酷似すると考へるのも一應無理はない。が、古音は必しもさうとは限らない。玁狁の狁は安南音で jwan、鬻或は粥は廣韻、正韻等によると之六切音祝とあり、其の安南音は juk、日本音は juku、薫育の育の安南音は juk、渾窳の窳と渾度の度との同國音は ju であるから玁狁の古音は χiem, jwan 獯鬻の古音は χiuen, juk であつたとも考へられる。更に上代の漢人が耶律音を一有する外國語を音譯した例證を擧げるならば、史記の匈奴傳に匈奴語比余とあるのを漢書の同傳には比疎に作り、漢譯の佛書には印度の英主 Asoka を阿育とも阿輸迦とも書き、後漢書の西域傳には西域の Sugduk 國を粟弋(粟戈とあるは誤)と書き、魏志に引用した魏略には之を屬繇と書いてある類を見ると、玁狁の古音は χiem-yum でなくして、寧ろ χiem-jwan であり、獯鬻の古音は χiuen-yuk でなくして、寧ろ χiwen-juk であつたと思はれる。また一方匈奴の古音を顧ると、奴の字音は do であるが、これは唐の時代に元來の nu が ndu と訛り、其が本邦に傳つたのである。奴の字が漢代に nu, na と響いたことは、後漢書や魏志の倭人傳に國語の夷守を卑奴母離、國語の灘、津を奴國と書いてあるのでも察せられる。さてかやうに匈奴の古音が已に

χiong-nu であつて、玁狁の古音が χiem-jwan 玁𤞷の古音が χiuen-juk であつたとすれば、此の兩者の音聲には從來學者の考へてゐたやうな密接の類似は無くなることになる。

周代の玁狁、玁𤞷は漢代の匈奴とその發音に差異があるといふ余輩の考察は、玁狁即匈奴論を主張する學者に取つて確かに一つの打擊に相違ないが、尙一層反對論者に不利な事實は、前に引用した賈誼の新論に載せてある一節である。此の書にいふ所は、漢國が月氏灌竄の來寇に對して、匈奴の戍兵を長城の緣邊に布いて之を防がうとする對策である。此の灌竄が已に周代の玁狁、玁𤞷であり、さうして其が匈奴と全然區別せられてある所から之を見ると、匈奴と玁狁とは全く種類を異にした民族と見做さんければならぬ。現今世界の東洋學者は大概匈奴を Tunguse 種と信じて疑はないが、其に何等確證のあるわけでない。余輩の研究した結果によると、匈奴は蒙古種を骨子として之に Tunguse 種を附け加へた雜種であり、其の本地は Baikal 湖と興安嶺との間にあつて、其の南下した者は陰山を根據としてゐたのである。だから匈奴の發祥地は興安嶺の方面に定むべきであつて、之を天山や Altai 山の方面に索むべきでない。尙その證據として匈奴の單于が西方と北方とに於いて討伐した民族は、多く Turk 種に屬するものと認められる。例へば冒頓單于が河西の地に於いて擊退した月氏と烏孫とは余輩の研究によると、Turk 種であり、此の單于と郅支單于とが匈奴の北方に於いて討伐した丁零は Turk 種の鐵勒であり、此の兩單于が此の方面で伐ち平げた隔昆即ち堅昆は唐の時代に Turk 種に化してゐた黠戛斯であり、又郅支單于が丁零の南方に於

いて打ち破つた烏揭即ち呼揭はTurk種の回紇である。かやうに考定してくると、史記や漢書に匈奴の北にゐたとあり、余輩が之を天山とAltaiとの間に推定した渾窳即ち渾庾もまたTurk種と見做すべきである。さうして此の渾窳が新書の灌窳であるのに誤がなく、又此の灌窳が周代の玁狁、獯鬻であるとすれば、此の民族と蒙古種の匈奴とは全く種類を異にしたものと斷定せざるを得ない。

（完）